

放射線災害・医科学研究拠点

第9回ふくしま県民公開大学の開催報告

【はじめに】

ふくしま県民公開大学は、「放射線災害・医科学研究拠点」事業の一環として、平成28年度から開催してきました。

共同研究の成果発表や学生によるディスカッション、食や子育てといった身近なテーマ等様々な内容を通し県民の皆様に情報を発信しています。

令和6年度は、令和5年度と同様に、全4回シリーズのテレビ番組として、2月19、26日、3月5、12日の計4日間で番組放送する形で開催し、本事業の研究成果や関連研究者の研究成果について広く情報発信しました。

今回の公開大学では次の4名にご講演をいただきました。

(1) 第1回 (2月19日 (水))

講師：放射線災害医療学講座

菅谷 一樹 先生

テーマ：「医学生への災害への認識・従事意図」

(2) 第2回 (2月26日 (水))

講師：相馬中央病院 齋藤 宏章 先生

テーマ：「震災後の公営住宅入居者の入居と介護の推移」

(3) 第3回 (3月5日 (水))

講師：放射線医学県民健康管理センター

小橋 友理江 先生

テーマ：「臨床と研究と公衆衛生の包括した取り組み」

(4) 第4回 (3月12日 (水))

講師：放射線健康管理学講座

阿部 暁樹 先生

テーマ：「仮設住宅居住経験が高齢者の身体機能に与えた影響」

【第1回放送】放射線災害医療学講座

菅谷 一樹 先生



「医学生への災害への認識・従事意図」をテーマにお話をいただきました。

<発表要旨>

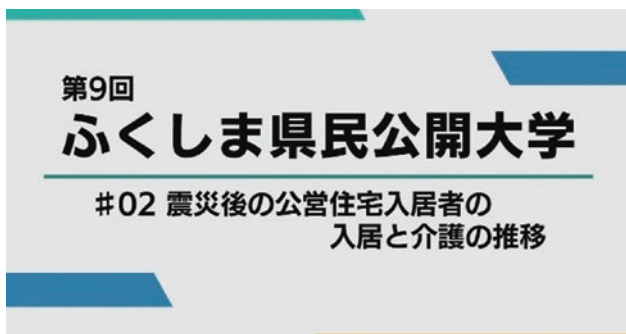
現代は災害が日常化しており、その種類も多様化しています。このような不安定な社会の中で、災害対応をより迅速かつ的確に行うためには、災害で活動する医療従事者の確保が必要不可欠です。ところが、医療従事者や消防職員を対象とした先行研究では、自然災害や人為災害と比較して、化学災害 (Chemical)、生物災害 (Biological)、核/放射線災害 (Nuclear/Radiological)、爆発物

災害(Explosive)といった特殊災害(CBRNE災害)はより従事したくないと考えていることが明らかになっています。本研究では、背景の異なる日本の5つの大学の医学部学生に対し、自然災害、人為災害、CBRNE災害にどの程度従事したいかを調査しました。

結果、全医学生において、CBRNE災害は自然災害や人為災害に比べて従事意図が低値でした。また、その捉え方には、所属校別に大学のカリキュラムや社会的背景によって特徴が認められました。

本研究の結果を踏まえて、大学ごとの社会的背景に則した「災害対応の在り方」を医学生に示すことで、従事意図を啓発することが、将来の危機における社会の需要に対応するために必要と考えられました。

【第2回放送】 相馬中央病院 齋藤 宏章 先生

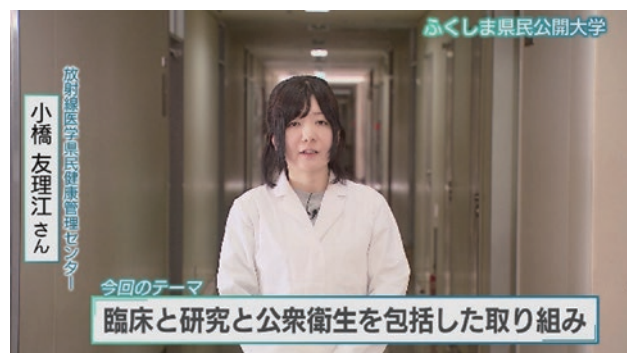
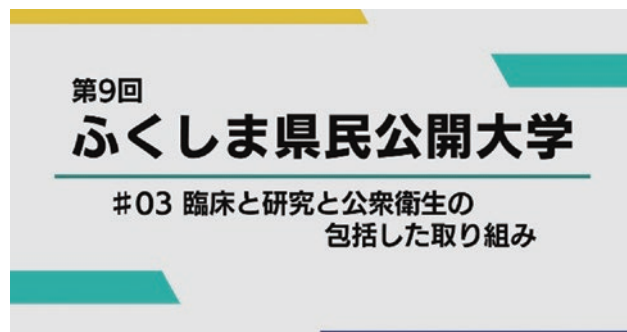


「震災後の公営住宅入居者の入居と介護の推移」をテーマにお話をいただきました。

<発表要旨>

相馬地域における公営共助住宅(井戸端長屋)の震災後の入居の状況とその後の介護認定の推移について発表した論文について報告しました。10年間に入居した65名のその後の経過を報告しました。30人が調査時点でも入居を継続し、全体の平均入居期間は6.4年、入居後の要介護認定発生割合は入居時要介護認定なしが0.0577/1人年、要支援認定ありは0.3358/1人年でした。震災後に井戸端長屋は幅広い年齢層・介護度の高齢者を受け入れ、その持続期間も長く保たれていました。このような取り組みが震災後に孤立した高齢者の住まいの悩みを解決する有用なツールとなり得ることを示唆しています。

【第3回放送】 放射線医学県民健康管理センター 小橋 友理江 先生



「臨床と研究と公衆衛生の包括した取り組み」をテーマにお話をいただきました。

<発表要旨>

カンボジアの病院で内科医として勤務する中で

公衆衛生の重要性を痛感した事、その後日本に帰国後に、コロナ禍で福島県の地域の病院において臨床を行う傍ら、研究と公衆衛生活動を包括したプロジェクトに関わる中で学んだ事をお話しました。さらに現在の福島県立医科大学での臨床や研究、公衆衛生の活動にどのようにつながっているかについてお話しました。

【第4回放送】放射線健康管理学講座

阿部 暁樹 先生



「仮設住宅居住経験が高齢者の身体機能に与えた影響」をテーマにお話をいただきました。

<発表要旨>

本研究では、東日本大震災後に仮設住宅への入居を経験した福島県相馬市在住の64歳以上の住民4,680人を対象に、10年間にわたる身体機能の推移を調査しました。身体機能の評価には、全身の筋力の指標となる握力と、バランス能力を示す片脚立ち保持時間を用いました。

調査の結果、仮設住宅居住経験者は、非仮設住宅居住経験者と比較して、特に片脚立ち保持時間

において長期的な低下傾向が認められました。一方、握力については両群間で有意な差は確認されませんでした。この結果は、避難生活による影響が特定の身体機能に対して長期的に現れる可能性を示唆しています。

これらの知見は、避難経験者に対する支援が長期的な視点で必要なことを示すとともに、バランス能力など多面的な身体機能へのアプローチが重要であることを示しています。

上記の内容に加えて、震災から14年が経過した現在、福島県浜通り地域の各自治体でどのような取り組みがなされているか、福島医大との関わりを含めて紹介しました。今回の研究で得られた結果をもとに、福島県内で被災された方々の身体機能へのより効果的なアプローチを検討し、今後の災害対応の一助となる知見を発信できるよう、取り組んで参ります。

【番組放送後】

番組放送終了後、放送当日にリアルタイムでご覧いただくことができなかった方や県外にお住まいの方などのために、番組の内容を一部編集した動画を公立大学法人福島県立医科大学の公式YouTubeチャンネルにアップロード・公開しました。公開後は、多くの方々に視聴いただいております。

※ 文中の役職はふくしま県民公開大学が開催された2025年3月当時のものです。